

オーストラリア・キャンベラ研修

～H26.03.22 - H26.03.28～

生命環境学群生物学類 小田切美穂

東京・成田空港からオーストラリア・シドニー空港を経てキャンベラ空港へ降り立って息を吸い込んだ瞬間、独特で爽やかな緑の匂いが鼻を刺激した。これはのちに、キャンベラ市内にたくさん見られるユーカリ\*1の匂いだとわかった。オーストラリアはちょうど夏が終わり、季節の変わり目を迎えていた。オーストラリアを訪れるのは初めてだった。オーストラリアは土壌の栄養分が非常に低く、塩害が発生しやすい、降雨量が少ないなどから不毛の地という勝手なイメージがあった。しかしキャンベラは見渡す限りの緑だった。昔住んでいたアメリカ合衆国とも少し雰囲気が違う。キャンベラは「最も美しい首都」とされるために、一から開発されてデザインされたそう。驚いたのは、近くの河をせき止めて、人工的に湖\*2を作ったということだ。湖の周りでは、人々が犬の散歩をしたり、のんびりとランチを食べていたりしているのが見られた。近くに公園もいくつかあり、東京やワシントンのような都市のようにせわしさのない街であった。

その土地の印象を決めるのはやはりその土地特有の動植物だろう。写真\*\*3はオーストラリアに生息する オウム目オウム科の鳥、オーストラリアキバタン。体毛色や羽色など全身が白で、黄色い冠毛が頭の上に丁髷のように乗っている。意外と鳴き声が綺麗ではなかったところに逆に愛着がわいた。キャンベラ市内ではあまり多くの動物種を見つけることはできなかったが、鳥類

は多種多様であった。常に鳥たちの歌声がどこからか聞こえていた。ユーカリの木も公園や街路にたくさん植えられていたが、一つ一つよく見てみると、幹の形、葉の形や広さ、葉のつき方などが少しずつ違う種類だった。研修日3日目には植物園を訪れたが、そこには何十種類ものユーカリの木が植えられていた。実際には600種類以上が存在するという。共通するのは木皮が剥がれ落ちてむき出しになっている白い幹と白みがかかった緑色の葉。硬い蓋のついた子房を壊すと粉上の種子が風にまった。



\*1



\*2



\*3

研修 2 日目にはキャンベラ市中心のすぐ隣にあるオーストラリア国立大学を訪れた\*4。大学に入ってみると、筑波大学を思い起こさせるような緑につつまれたキャンパスだった。キャンパス内で川が流れていて、緑がおいしげっている。学科ごとに集まっているビルディングの間を学生たちが自転車や徒歩で行き来する。とても親しみを感じた。大きな違いといったらキャンパスを覆う木々がユーカリやドングリであることや、たくさんの色どりの鳥たちが空を飛びまわっていたことだろう。一部の学生は学生プレジデントを決めるための選挙活動を行っていた。後日訪れたキャンベラ大学\*5でも同じような学生活動が行われていた。自主性を重んじ、他の学生たちの声を集めてよりよいキャンパスライフを積極的につくってこうという姿勢がみられた。



\*4



\*5

滞在期間はあいにくにもほぼ毎日雨にみまわれたが、私たちは市内や郊外、大学の

キャンパス内での様々な動植物を発見・観察しながらウォーキングを楽しむことができた。それが幸いして、真昼間に野生のカンガルーに出会うことができた。雨の日でも動植物は生き活きとしていた。キャンベラを訪れた際は、是非ウォーキングを勧めたい。急いでいては見逃してしまう小さな発見がたくさんある街だ。鳥たちの鳴き声に耳をかたむけたり、ユーカリの木をひとつひとつ観察して違いを見つけたりするのはとても楽しかった。

今回の研修での個人的な目標は、自分の専攻分野である植物についてオーストラリア土着の植物について学ぶことだった。植物園や博物館だけでなく、道を散歩するだけでも意識次第で学び取れることがたくさんあるのだということに気付いた。日本国内にいても、図書館などで図鑑を見れば、オーストラリアに生息する動植物の名前や生態をある程度知ることができる。しかし、生まれもって持ち合わせた視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚の五感を精一杯に研ぎ澄ませて体でその土地を感じることは、その土地を訪れなければ決して体験できることではないだろう。準備期間も滞在期間も短かったので、十分に学ぶことができなくて残念だったが、今回の研修で改めて感じ取れたことを次につないでいきたいと思う。これから先、研修等で海外を訪れることがあるときは、そこの土地の気候・土壌の特性と土着の動植物を学び、その土地特有の食糧生産の問題点・改善点などを考察してみたいと思っている。